



農作業メモ

水稻の栽培について

(育苗から田植えまで)

1 麦わらは、有効活用しましょう

麦類収穫後の麦わら焼却に伴う煙が交通の妨げや近隣住民にも迷惑をかけることがあります。

また、平成26年に他県では麦わらを焼却中に、昨年は埼玉県で稲わらを焼却中にやけどを負い亡くなるなど痛ましい事故がありました。

麦わらは燃やさずに、ほ場へすき込んだり、搬出して堆肥化するなどして有効活用してください。

すき込む場合のポイント

①カッターにより短く細断し、均一に散布します。

②耕うんは15センチ程度と深くおこします。

③代かきは、浅水で行います。

④施肥は、初めてすき込んだ年には基肥窒素量を慣行より1〜2割多く施肥し、わらの分解促進を図ります。

その後、毎年すき込む場合には、3年位かけて慣行の施肥量に戻します。

2 水稻の移植前後の栽培管理

(1) 育苗後半時の留意点

育苗期間が長いと、葉の黄化がみられた場合は追肥を行います。目安として箱当たり窒素成分で0.5g程度を500gの水に溶かして散布します。散布後、葉についた肥料は水で洗い流します。

葉齢が4.0葉、草丈20センチ程度のしつかりした苗を植え付けます。

(2) 耕うん

根域を広げ、養分や水の吸収を高めるため、耕深15センチを目標に行います。

(3) 施肥(基肥)の基準

基肥の基準は、10坪当たり窒素成分で「キヌヒカリ」、「彩のかがやき」、「彩のさずな」いずれも5gです。側条施

肥の場合は2割程度少なくします。

(4) 移植時のポイント

① 植付本数は2〜4本に調整します。植え付け本数が多いと、病害虫の発生を助長したり、茎が細くなり倒伏の危険性も高まります。

② 植付深さは3センチ程度とします。深植えにすると初期生育が悪くなります。

③ 植付株数は生育期間の短い作型のため、坪当たり60〜70株を基本に植え付けます。

(5) 除草剤散布

6月移植では、気温が高いことから、代かき後すぐに雑草が発生し始めます。使用する除草剤の処理時期に従い、水深を適正に確保し、早めの散布を心がけます。

また、散布後7日間は湛水を保ちます。なお、大雨が予想される場合は散布を順延します。

(6) 初期の水管理

移植直後はやや深水とする。活着後は初期生育確保のため2〜3センチの浅水で管理します。

(7) 箱施用剤防除

「キヌヒカリ」は、イネ縞葉枯病に対して抵抗性がないので、イネ縞葉枯病ウイルスを媒介するウンカ類の防除を行います。

主な箱施用剤

薬 剤 名	主な対象病害虫	使用量	使用回数	備 考
ルーチンアドスピノ箱粒剤	内穎褐変病、いもち病、ウンカ類 等	50g/箱	1回	使用時期、使用方法については、対象病害虫により異なりますので、ラベル表示を確認して下さい
ツインターボフェルテラ箱粒剤	内穎褐変病、いもち病、ウンカ類 等			
フェルテラ箱粒剤	フタオビコヤガ 等			
アドマイヤーCR箱粒剤	ウンカ類 等			

農薬は必ずラベル表示を確認して使用してください。記載農薬は平成28年4月19日の登録状況に基づいています。